

山法師

「近頃山に登った蓮長とかいう田舎坊主は、おぬしのことか」

「いかにも拙僧だが」

「うわさにたがわず、すばらしいからだをしてくさるわ、学僧などにはもつたないしろ物ぢや」

こういいながら、蓮長の体軀を、なめまわすように見まわしたのは、当時叡山において名うての荒法師弁盛その人であった。

みれば、その輩下らしいのが、みるもいかめしい叡山独特の山法師姿で、大杉の木立の下にたむろして、こつちを見ながら、にやにやと笑っておる。

弁盛は腰の一刀を軽くたたくと、言葉が続けた。

「いまだき、学僧を志すのは、身体のひよわい公卿育ちが座主をめあての仕事ぢや、その座主も、近頃は親王か関白の息子しかなれんときまった世の中、お主のような田舎坊主、いくら学問を励もうとも、その出世は高が知れている、みれば天晴れ堂々たる偉丈夫、おぬしの手はなあ、

筆を握ぎる手ではない。劔を執る腕じゃがどうだ、返答をうけたまわろう」

にこにこ笑つて聞いていた蓮長法師、臆する色もなく答えた。

「おことわり申そう、もはや俊範上人の講義が始まる時刻、失礼……」

この声をきくと、今まで大杉の根もとにおつた五六人の山法師は、ばらばらつと大講堂に通ずる路をふさいでしまった。それをみた弁盛、

「待て待て」

と声をかけて、

「もとの処で休んでおれ、俺が独りで料理してみせてやるから」

杉木立の間から洩れる日の光が、長刀の穂先きにきらきらと光つたが、輩下の山法師、一言もなくもとの位置に戻つた。矢庭に、一人の山法師が、うおつと犬のように吠えて飛び上つたかと思つと、数尺上の杉の大枝が、ぱつぱつと蓮長法師の足許におちてきた。

「みられたか蓮長、あの長刀はなあ、返答如何では、何時おぬしの首にくるかも分らんのだや、宗源俊範の試験を受けただけではこの山にはおられんのだ。かくいう叡山荒法師の統領たる東塔の住人弁盛房の印可を受けねば、一日たりともこの山には安閑たり得ぬ。東塔千八百十三人西塔七百十七人横川四百七十人、叡山の大衆三千人の命をあづかりおるのがこの弁盛ぢや、いくら学問をするというても、山の霞を食つて生きておるわけではあるまい。飯も食おう、酒も呑もう、

十八代良源和尚わが山を復興して伝教大師の再来とか言われた方ぢやが、山の奴等が病気になるのは、霧の深いこの山で酒を呑まんからぢやと言われて五辛は入るべからずぢやが、酒は登るべしと言われた。もののわかつたお方ぢや。だがその薬酒を運び、合戦の度ごとに必ずねらわれる山徒三千人の命の綱たる米蔵を守護するのは、何びとの役目だと思ふか、かく言う弁盛の采配だと思わぬか」

「その理は在山の掟としてたしかに承け給わり承知致しておる、よつて蓮長も順序を経て、そこもとへご挨拶に参りましたが、たしか坂本へ下つて留守とのこと」

「さればさあ、今日この道に出ばつて俺が直々の挨拶へまいつたのじや。どうじや堅苦しい学問をやめて、俺のもとにこられんのかのう」

「仔細あつて遙々房州の片田舎より、この山へ登つたもの、どうていお言葉に従うわけにはまいらせん」

「よいわよいわ。まあ俺が話をきけ、血湧き肉おどつて、どうてい経机の前などに座つておられようか。その六尺豊かな体軀をして。そもそも正暦四年より今年寛言元年に至る三百五十年間のわが山と三井園城寺との合戦を聞こうならばだ。本日このようないかめしい姿をしておるのも伊達や酔興ではないわ、明日こそは山門の衆徒が忘れてはならぬ三月の十六日じや。百年前の康治元年のこの日こそ三井の衆徒が吾が叡山の東塔西塔の房舎四十余宇及び丈六堂に火を放つて焼き

打ちしおつた日ぢや。だがなお、それよりさかのぼる、六十一年前の永保元年六月九日、今なおわが山に残る先師の手柄話によるならば、山門の衆徒は三井寺に暴れに暴れて余す所がなかつたという。その日園城寺をおそつて御願所十五か所、堂宇七十九所、塔三基、鐘楼六か所、経蔵十五か所、神社四か所、僧房六百二十一か所、舎宅一千四百九十三宇を焼き討ちしたと伝おつておる。しかるに九月十三日園城寺の衆徒は、その報復を試みんとし、決死隊三百人が密かにわが山に登つて火を放たんとした。これを事前に捕えたわれ等が先師達は、悉くこれらを捕えて殺傷し、わが山にことなきを得たのじや、みよ、あの谷底には今もつて、ちよつと地を掘れば、当時の舍利頭がうようよとところがつてくるわ。

さて、園城寺衆徒のその報復を手をこまねいて待つは愚なりとしたわが山の衆徒は、再びそれより進み討つて、九月十五日園城寺へ攻めいつて、またもや堂院二十か所、経蔵五か所、神社九か所、僧房一百八十三か所、舎宅数千等を焼き払つて余すところなかつたという。保安二年にまたまた園城寺を焼き払つたが、二十一年後の康治元年の明日の日はわが山が始めて不覺をとつて四十余宇を灰燼に帰した日だ。だがその仕返しはちようど二十一年後の長寛元年六月九日、四度園城寺を焼き払い、健保二年五度これを焼いて、その芽をつまんだが、本年はちようどそれより三十一年目、敵も合戦の準備がとつたであらうと察する。ましてや明日は三月十六日、園城寺衆徒がわが山をおそつてたつた一度の勝を得た日じや。いつなん時、不意の夜襲をかけてく

るかも知れんのじゃ、今宵から明日の朝迄、われ等は山の要所要所をかためて康治元年の悲惨をとりかえさぬつもり、このような時だ、蓮長とか、仏飯をはんだからには力をかされい」

